

二〇〇四年度

大学院文学研究科修士論文目録  
文学部卒業論文目録  
文学会賞授賞卒業論文要旨

愛知大學文學會



# 二〇〇四年度大学院文学研究科修士論文目録

## 修士論文

### 文学研究科

#### 日本文化専攻

〇三ML〇六〇二 田 幡 洋 一 寶暦の改暦と土御門家

〇三ML〇六〇四 原 田 享 明 川端康成論

#### 地域社会システム専攻

〇三ML〇七二二 原 献 吉 安城市における農業生産の組織化とその条件

——高棚地区と上条地区の比較研究から——

#### 欧米文化専攻

〇三ML〇八〇二 小 林 浩 章 文体論とバイイの学説をめぐって

〇三ML〇八〇三 住 田 昌 寛 『ヘーゲルにおける始源の概念』



# 二〇〇四年度文学部卒業論文目録

## 哲学科

### 東洋哲学専攻

- P四〇一 林 みのり インドと死の思想  
 ○P四〇三 仲田 有希 山鹿素行と土道  
 ○P四〇五 岩瀬 愛 孔子に学ぶ教育論  
 ○P四〇二 清水 佑亮 韓非子の研究  
 ○P四〇三 村下一尚 中国仏教における浄土教の成立及びその背景について  
 ○P四〇三 伊藤 静香 中国における民族の歴史と氣候風土から見た宗教  
 ○P四〇四 衆 育枝 抱朴子と仙人  
 ○P四〇五 赤堀 順一 「顔回」という男について  
 ○P四〇六 松岡 由依 周公旦と上帝から天へ  
 ○P四〇七 坂本 香奈 殷王朝  
 ○P四〇九 中村 直子 墨子の思想  
 ○P四〇〇 竹下 絢子 仏教と仏像の関連性  
 ○P四〇三 野村 真由子 易に見る歴史と易が与えたもの  
 ○P四〇三 伊計 亜都 平民意識の変化と縦横家

- P四〇三 白坂 健太郎 董仲舒の思想  
 ○P四〇四 清水 敦夫 司馬遷と老子  
 ○P四〇五 田嶋 彰人 王充の思想——その合理主義について  
 ○P四〇六 縣 久美子 性善説と性悪説の狭間で  
 ○P四〇七 油野 綱代 中国人の世界観  
 ○P四〇八 岡田 尚子 易と人との深いつながり  
 ○P四〇三 三淵 健司 『管子』の政治思想——法思想を中心にして——  
 九P四〇二 山田 涼太 老子の「無為自然」とその現代的意義  
 九P四〇三 日比野 方樹 陸象山「心即理」について  
 西洋哲学専攻  
 ○P四〇二 朝倉 亮太 哲学とは何か  
 ○P四〇三 志垣 貴子 同一性の暴力——アドルノ「否定弁証法」より——  
 ○P四〇四 鈴木 良明 『現代の道徳的諸問題に関するニーチエ的考察』  
 ○P四〇五 今田 和秀 『現象学的認識論』

——封建制度と乱世のなかで——

○P四二八 飼 沼 ゆかり  
イエスとヘーゲル——若き

○P四二九 市 川 瑛子  
ヘーゲルの宗教観——  
私とは何か

○P四二二 上 田 祐美子  
デカルトの神概念における一  
考察

○P四二三 片 桐 綾子  
「哲学」を考える  
○P四二三 石 原 稔彦  
アリストテレス『ニコマコス  
倫理学』における徳と幸福の  
問題

○P四二四 小 倉 麻紀  
私の存在における他者との関  
係について

○P四二五 岡 下 智江子  
生と愛

○P四二七 大 川 恵  
心はどのように生まれてくる  
か

○P四二八 小 杉 真琴  
安楽死は認められるべきか

○P四二九 正 平 祐紀子  
メルロ・ポンティの表現論

○P四三〇 平 松 三紀  
人格の同一性について

○P四三二 中 原 隆行  
運命の概念における一考察

○P四三三 村 井 裕美  
生命の平等と法

○P四三三 津 荷 進吾  
身体と表現

○P四三三 梶 原 伸吾  
哲学の可能性

○P四三六 富 野 隆治  
世界における身体

○P四三七 奥 村 麻紀子  
人にとって道徳とは何か

○P四三六 塚 本 まどか  
自己と他者の関係について

○P四三九 鈴 木 早紀  
サルトルの『存在と無』にお  
ける人間の自由について

○P四三〇 吉 川 苑子  
ソクラテス、デカルト、分析  
哲学における知識論

○P四三三 鈴 木 佐和子  
自我の存在について

○P四三三 長 谷 川 暁人  
西洋哲学史的観点におけるベ  
ルグソンのイマージュについ  
て

九九P四二五 松 崎 慶孝  
理論と実践

### 社会学科

#### 社会学専攻

○S五〇一 中 野 祐樹  
「犯罪と社会」——被害者の立場  
から——

○S五〇三 藤 城 美佳  
他者から受ける影響と「私ら  
しさ」の形成

○S五〇三 高 田 裕子  
携帯コミュニケーションによ  
る社会生活の変容

○S五〇四 山 口 有美  
「サード・エイジ」という生  
き方——フランス高齢者のライ  
フスタイルから——

○S五〇五 菅 沼 明美  
農産物直売所による内発的地

域開発について

○S五〇六 老平 美保子 育児を通して見る社会——子育ての社会的意味について——

○S五〇七 山内 千歩 現代社会におけるプロ野球——大リーグとJリーグとの比較から分かること——

○S五〇八 安井 加代子 変身願望の社会学——化粧・美容整形・コスプレに見る変身願望——

社会と暴力

○S五〇九 前川 勇次 しつけとしての迷信の道具性

○S五一一 山口 佳菜 異文化コミュニケーション——多文化主義の視点から——

○S五〇二 佐藤 香菜 薬物濫用と若者 離婚に伴う親子関係の変容

——新たな親子関係の在り方——  
生産と消費の記号性

○S五〇四 水野 雄亮 中年女性のライフコースと自己形成

○S五〇六 竹平 佳子 少年犯罪に対する社会的意識

○S五〇七 倉橋 絵美 書店経営と地域性——豊橋・豊川を事例として——

○S五〇八 小林 愛子 ファンタジーの社会学——ネ

○S五〇九 鈴木 章裕 オ・ファンタジーに見る「魔法のノーマライゼーション」——日本人が得た「豊かさ」と喪失した「豊かさ」——日本の労働状況が及ぼす社会的影響——

○S五〇〇 加藤 さおり 子ども虐待——地域で子どもを育てていくために——

○S五〇三 富田 知加 青少年における社会的ブラティックの形成過程

○S五〇三 余 語 勇紀 現代社会におけるメディアスポートの意義

○S五〇三 江場 靖彦 現代社会における流行のメカニズム

○S五〇四 加藤 歩 創られる真実と受け入れられる虚像

○S五〇五 溝口 純司 日本における住宅形態・住様式・ライフスタイルの変化

○S五〇六 草間 幹博 三河湾の沿岸開発と環境

○S五〇七 中島 康之 スポーツと社会——野球とbaseballの相違から見る日本——

○S五〇八 榊原 弘隆 「流行の衰退と日本人のパフォーマンスについて」

○S五〇九 八木 昭至 国際比較を通して浮上する

## サッカ―の諸問題

- 二五〇〇 高橋 由布子 家庭環境と少年非行の関連性  
 ○二五〇五 丸山 由加里 成年期における男女の友人関係

係

- 二五〇六 田中 亜由美 大学生の対人関係と心の健康  
 ○二五〇七 渡邊 明美 若者の友人関係と携帯電話

- 二五〇八 吉田 早織 現代と健康

- 二五〇九 樋口 加織 虐待と子どもへの影響

- 二五〇四 石原 枝里 フリーターと社会

- 二五〇三 五藤 美香 テレビドラマを通して見る現代女性の結婚観

- 二五〇四 権田 貴美 メディア社会におけるメディア・リテラシーの必要性と取り組み

- 二五〇四 若山 大介 日本のスポーツ文化

- 二五〇五 井上 亮子 対人関係における利他性と偽善について

- 二五〇六 後藤 紗依 家族機能の変容——子どもと団らん——

- 二五〇四 野 崇浩 戦争、紛争、テロ——その社会学的考察——

- 二五〇四 渡 辺 芳人 ダイエットの社会学的考察

- 二五〇七 川 上 まほ インターネットのメディア特

## 応用社会学専攻

- 二五〇一 山本 順子 日本人における同調行動の心理

性

- 二五〇三 鈴木 さやか 近年の少年による凶悪犯罪について

- 二五〇三 藤田 知架 障害者とその家族をめぐる差別と共生について

- 二五〇四 伊藤 友理 信頼社会における若者の対人関係

- 二五〇六 坂上 兼康 現代日本の学歴社会——日本と世界との比較を通して——

- 二五〇七 伊藤 幸代 子ども期におけるジェンダーの社会化——メディア・教育の視点から——

- 二五〇八 尾崎 裕子 児童虐待の発生と派生

- 二五〇九 三宅 由希子 男女の衡平な恋愛関係

- 二五〇〇 阿知波 利幸 少年犯罪と社会変動

- 二五〇一 児島 章 自殺と地域社会との関係性について

- 二五〇三 水野 紗央里 対人関係の親密度と色彩イメージ

- 二五〇三 本多 聖子 児童虐待とドメスティックバ



イオレンス

○二五二四 秋峯 孝博 現代における少年非行の実態と課題

と課題

○二五二五 青木 紀子 中年女性における自己向上意欲と自己評価

生涯学習とライフスタイル

○二五二六 吉見 宏恵 スクリーンを通してみえてくる日本

○二五二七 長尾 真由美 労働環境と労働者の変容

○二五二八 小島 慶子 子は親と似た人を好きになるか？——自己開示にみる親子の親密な関係性——

○二五二九 小笠原 加奈子 現代社会における末期医療

○二五三〇 加藤 明日香 〓ホスピスから学ぶターミナルケアと死生観

○二五三一 岩崎 浩史 テロリズムの社会性

○二五三二 佐藤 不二江 祭りとまちづくりに関する研究——どまんなか祭りを事例として——

○二五三三 竹内 志帆 環境問題に対する市民活動と地域づくり

○二五三四 太田 くみこ 自己意識と鏡との関係

○二五三五 古田 恵里 自然環境の保全とNPO活動

——江南市・環境NPOに参加して——

○二五三七 石田 美佳 教育的現実と教育改革

○二五三六 稲垣 愛子 高齢者介護と地域

○二五三三 北村 美純 ミステリー文学の受容

○二五三三 有田 千紘 人間関係におけるストレスと癒しの効果

○二五三三 宇田川 紗智 女子大生のアイデンティティ形成に影響する社会環境の比較

○二五三六 大谷 節子 食品消費と安全・安心

史学

日本史専攻

○二六〇一 大塚 愛子 頼朝の征夷大將軍と鎌倉幕府の関係

○二六〇二 深津 朋宏 『豊臣秀吉の朝鮮出兵の動機について』

○二六〇三 加藤 大智 東山文化の成立とその後の日本文化への影響——足利義政の政治と芸術への興味を中心に考える——

○二六〇四 齋藤 亜矢子 設楽原の戦いについての考察

- 〇二六〇五 有馬 舞子 蜜蜂義塾と愛知医学校——近藤家一族を中心に——
- 〇二六〇七 石居 謙太郎 遠州新居宿本陣 飯田家日記 史料の基礎的研究
- 〇二六〇九 吉田 明子 古代日本の女帝について
- 〇二六〇〇 栗下 朋子 日本古代の音楽について
- 〇二六〇一 伊藤 一樹 猿楽能の成立・演奏楽器の起源
- 〇二六〇二 吉田 怜子 美濃焼物の流通経路と仲買人制度
- 〇二六〇四 石川 智子 古代の後宮について
- 〇二六〇五 中村 哲子 中世坂東における上総氏・千葉氏の研究
- 〇二六〇六 杉山 英照 日本古代の疫病に関する考察
- 〇二六〇七 田中 千明 三州白鳳寺における富くじ興行の研究
- 〇二六〇八 村瀬 小春 日本中世における女性の地位と役割について
- 〇二六〇九 藤枝 伸吾 菰野町における戦争記念碑について
- 〇二六〇〇 新美 雄祐 道鏡についての一考察
- 〇二六〇二 久保 充司 八世紀前半の政治過程について
- 〇二六〇三 光岡 綾子 古代の服制について
- 〇二六〇三 杉村 安澄 武家と公家の家紋と名字について
- 〇二六〇五 山下 皓子 今川仮名目録についての考察
- 〇二六〇六 藤田 史郎 古代国家と東北地方
- 〇二六〇七 日置 豊 空海に関する一考察 社会事業について
- 〇二六〇〇 小島 綾 西三河における木綿等流通の一考察
- 〇二六〇二 由良 佳子 古代の葬制について
- 〇二六〇三 平良 希美 藤原仲麻呂政権について
- 〇二六〇三 足立 麻利 伊藤圭介と日本産物志
- 〇二六〇四 清水 智子 名古屋における近代女子教育とその先駆者たちに関する一考察
- 〇二六〇五 樋口 仁美 中世の天皇の暮らしと信仰について
- 〇二六〇六 仲 稚菜 中世武士と宗教
- 〇二六〇六 土井 智津子 中世の商業について
- 〇二六〇元 上田 綾美 北畠顕家についての一考察
- 〇二六〇四〇 香田 梓早 江馬活堂の医療活動——武士身分である医師の存在形態について——

○H六四一 石本 かおり 鯖江藩間部家の婚姻に関する

一考察

○H六三六 塩田 真幸 平将門の乱について

○H六四三 細見 信彦 享祿・天文年間における木沢

長政の動向について

九H六〇八 板橋 高志 三河における応仁の乱の影響

について

東洋史専攻

○H六〇三 青木 伸明 李承晩と朝鮮戦争

○H六〇六 水野 文子 宋代の教坊制について

○H六〇七 加藤 健太 植民地台湾における同化政策

について

○H六〇九 左右木 愛 間島における抗日闘争

○H六一一 今橋 雅和 宋代の行について

○H六一三 鈴木 吉洋 『義和団運動』について 山

東省における大刀会の活動につ

いて

○H六一五 榊原 実誉 ニューギニア食人譚について

○H六一六 岩瀬 寿子 小松川事件と在日コリアン

○H六一七 柴田 由有 植民地インドにおけるヒン

ドゥーとムスリム

○H六一八 佐溝 宏章 シンガポールの福祉政策と国

民統合

○H六三〇 松波 恭平 ラーマンの民族観について

——一九六九年の「人種暴動」に對

する見解を手がかりとして——

○H六三四 植村 友紀子 後漢桓帝期における宦官につ

いて

○H六二六 深谷 慎平 北宋期における茶法の変遷

曹操の人材登用

○H六三三 成木 亮介 「明末、江南地方の出版文化

——毛晋の出版を中心にして——」

○H六三三 高橋 恰子 明末清初の詩人呉偉業につい

て

○H六三五 栗本 裕志 ガンジーの聖人化について

「マレーシア国民の歴史」と

マラッカ王国

○H六三九 小島 直子 玄宗時代の官僚について

同盟会時代の孫文について

○H六四〇 牧野 廉 元代における漢人知識人への

待遇

○H六四四 岡村 拓美 秦漢時代における墓葬の変遷

明代嘉靖期の官吏朱紱につい

て

○H六一〇 亀井 大輔 明前期の京営について——班

軍制を中心にして——

〇二H六三二 中川 真介 唐代府兵制度崩壊に関する研究

〇二H六三三 王 憲彬 敦煌文物の流失と保護について

九H六二七 天野 純希 元朝におけるモンゴル至上主義の実態

地理学専攻

〇二H六〇一 村越 任晃 降水によつて変化する流量に伴う水質変化

〇二H六〇三 熊谷 真 豊橋市における人口および生活施設から見た郊外化

〇二H六〇四 北原 和幸 飯田市における、りんごとなしの観光農園の実態

〇二H六〇五 田中 広志 豊橋市におけるコンビニエンスストアの客動向

〇二H六〇六 原 明香 豊川流域における祭礼の地理学的研究

〇二H六三〇 清水 勘太郎 長野県遠山郷における茶栽培について

〇二H六三一 荻本 奈美 木曾川分流の旧河道である三宅川の水質

〇二H六三三 福島 雅生 有松の町並みづくりと絞り産業

〇二H六三四 合津 芳彦 長野県美麻村における日常食の地域性

〇二H六三五 吉澤 雅之 長野県小谷村における土砂災害と住民意識

〇二H六三六 村山 真由美 岐阜市におけるバス路線の競合と乗客の対応

〇二H六三七 緒方 悠葵 消費者金融店舗の分布と立地に関する考察

〇二H六三八 鈴木 英敏 市街地内における風俗店の分布と立地移動

日本・中国文学科

日本語日本文学専攻

〇一L七〇〇一 川瀬 真理 『落窪物語』研究

〇一L七〇〇二 古田 将史 安倍晴明研究

〇一L七〇〇三 國松 高康 椎名麟三『永遠なる序章』論

〇一L七〇〇四 岡本 卓也 実況のことばの研究

〇一L七〇〇五 川角 まりこ 『新釈諸国噺』論

〇一L七〇〇六 竹内 結香 「しずか」と「おだやか」の語誌

〇一L七〇〇七 藤永 美穂 現代短歌の語彙の研究

〇一L七〇〇八 日比野 泰子 『醒睡笑』の研究——和尚と小僧を中心に——

〇一七〇九 吉田 祐子 類似した意味を持つ動詞の研究

〇一七〇二 石田 加代子 『天稚彦草子』の研究

〇一七〇三 黒柳 梨花 「痴人の愛」論

〇一七〇三 中村 良太 「悲しみの代価」

〇一七〇四 村上 奈緒 「とはずがたり」にみる自照性

〇一七〇五 甲村 亜紀子 『源氏物語』における「夢」の表現——源氏・藤壺の関係を中心に——

〇一七〇六 山中 一輝 アスペクトを表す補助動詞の表現について

〇一七〇七 山田 絵理 転生譚について——『日本霊異記』を中心に——

〇一七〇八 服部 貴士 言葉の転用と新聞の見出し語彙研究

〇一七〇九 福岡 未紗 類義語動詞の研究——「あがる」「のぼる」とその複合語について

〇一七〇二 丸谷 大輔 複合名詞の語構成について

〇一七〇三 石川 智子 宮沢賢治「銀河鉄道の夜」論

〇一七〇四 加藤 泰史 『檸檬』論

〇一七〇五 水谷 仁美 「とりかへばや」と「有明の別れ」——異装と男女観——

〇一七〇六 田 頭 裕子 光源氏をめぐる女性達

〇一七〇七 竹 下 雅 貴 「女」「女君」を手掛かりとして——

〇一七〇八 山 本 幸 枝 浦島物語研究と玉手箱を中心として

〇一七〇九 後 藤 真 以 三河方言に残る古語

〇一七〇〇 竹 内 一 代 女流短歌の研究

〇一七〇三 柴 田 実 『今昔物語集』肉食説話の研究について

〇一七〇四 大 津 晃 美 源氏物語における「死」の描写——「けぶり」を中心に——

〇一七〇五 寺 田 昌 広 『源氏物語』における若き女房像

〇一七〇六 秋 山 千 春 芥川龍之介「河童」論

〇一七〇七 伊 佐 次 多 絵 『今昔物語集』における狐の変身譚

〇一七〇八 竹 島 寛 幸 人を表す漢語接辞について

〇一七〇九 白 羽 恵 子 擬音語・擬態語について

〇一七〇四 貴 田 有 沙 日本文学における「桜」考——『万葉集』から平安和歌へ——

〇一七〇一 霧 田 有 沙 『源氏物語』における「霞」と「霧」の描写——心象風景を中心に——

- 〇一七〇四三 天野 はるか 宮沢賢治「よだかの星」論  
 〇一七〇四二 牧原 美恵 『源氏物語』における「まめ人」の乱れ——夕霧を中心に——  
 〇一七〇四一 杉浦 友紀 源氏物語における「花の香り」とその表現——橘と紅梅——  
 〇一七〇四〇 竹内 美紀 源氏物語における動詞の派生——「隠す」「隠る」を中心に——川端康成『古都』論  
 〇一七〇三九 林 美緒 川端康成『古都』論  
 〇一七〇三八 蟹江 真由美 擬情語の研究  
 〇一七〇三七 伊藤 さやか 『源氏物語』における「このかた」——「こなた」との比較検討によって——  
 〇一七〇三六 小林 陽子 文末表現にみる女性語・男性語  
 〇一七〇三五 池田 佳世 日本語における二人称代名詞の研究  
 〇一七〇三四 日比 友絵 程度の表現について  
 〇一七〇三三 松井 茜 中島敦「山月記」について  
 〇一七〇三二 尾張部 由里 三島由紀夫『潮騒』について  
 〇一七〇三一 平道 秀和 日本語における副詞の研究  
 〇一七〇三〇 大島 亜弥 俗語表現の研究  
 〇一七〇二九 内田 和美 『今昔物語集』における鬼について
- 〇一七〇六〇 楊 天毓 中国語に見られる外来語としての日本語  
 〇一七〇六一 森 下里美 『山家集』の「月」の歌——八代集との比較から——  
 〇一七〇六二 恒川 彩 「わたしが・棄てた・女」論  
 〇一七〇六三 稲垣 まゆ 『是害房絵』の研究  
 〇一七〇六七 中塚 徹 マンガにおける擬音語・擬態語の考察  
 〇一七〇三六 松岡 岳史 酒呑童子の研究  
 〇一七〇三九 中村 美希 宮沢賢治「ポラーノの広場」論
- 中国語中国文学専攻  
 〇一七〇二一 松岡 由佳 隨園食单  
 〇一七〇二二 竹内 裕之 秦の始皇帝 その生涯と業績  
 〇一七〇二三 林 英之 老荘思想  
 〇一七〇二四 小島 多美子 王羲之論——蘭亭序を中心に——
- 〇一七〇二五 浅野 裕作 酒  
 〇一七〇二六 吉見 祐 「醬の文化」について  
 〇一七〇二七 辻 真由美 中国人の語学能力  
 〇一七〇二八 佐藤 美由紀 年間行事としてのかまど祭  
 〇一七〇二九 熊谷 明日美 曹操——その生涯——  
 〇一七〇三〇 小久保 有香 京劇

- 〇一七二二 石川 佳世子 中国茶文化  
 〇一七二三 伊神 玲子 胡同の中の四合院  
 〇一七二三 長谷川 史子 『論語』の解釈——学而篇第一章を中心——  
 〇一七二四 森 三和子 西太后の人物像  
 〇一七二六 山本 陽子 言語と思考  
 〇一七二七 三浦 智恵 周恩来

## 欧米文学科

### 英語英文学専攻

- 〇一七五〇 竹内 みゆき イギリス英語研究  
 〇一七五〇 谷口 千賀 一九世紀における女性と服装  
 〇一七五五 小林 満菜子 一九世紀ヴィクトリア朝の生活と文化——ギッシングの描いた労働者階級——  
 〇一七五六 七原 詩歩 日英賭博比較研究  
 〇一七五七 反橋 陽子 英語を学ぶにあたって——日本語と英語の比較——  
 〇一七五八 都築 美加里 エリザベス女王とその時代の服飾文化史  
 〇一七五九 永江 智美 A STUDY OF JOHN KEATS  
 〇一七五〇 鈴木 里沙 『若草物語』研究  
 〇一七五二 鈴木 真理子 Thomas Hardy論——Wesser

- 〇一七五二 鬼頭 和也 Talesを中心  
 〇一七五三 岡田 祥子 ヴィクトリア時代のサブ・カルチャー  
 〇一七五三 岡田 祥子 英語における男女差別  
 〇一七五四 梅澤 有里 黒人英語について  
 〇一七五六 光部 尚江 異文化間コミュニケーションについて——日本と英語圏の違い——  
 〇一七五七 大竹 利彦 少年が「見た」もの  
 — A Study of Go Tell it on the Mountain by James Baldwin  
 〇一七五九 川口 由加里 ヴィクトリア朝の女性  
 〇一七五〇 木股 紗代 A Study of The Wonderful Wizard of Oz  
 〇一七五二 藤田 義明 Jane Austen 研究  
 〇一七五三 佐古口 真美 雇われ者から一躍ヒロローとなったカウボーイの歴史  
 〇一七五三 鈴木 健朗 ビートルズについて  
 〇一七五四 下海戸 寛之 ロンドンにおける鉄道と住宅  
 〇一七五五 山口 智子 コーヒーハウスの日英比較  
 〇一七五六 原 明子 Why is The Story of Oz Loved By Many People?  
 〇一七五七 深谷 真子 日英人名比較研究

- 〇一七五八 天野友貴 『武器よさらば』研究
- 〇一七五九 松本潤 貸本文化と日本とイギリスの比較を通して
- 〇一七五〇 市川智架 一九世紀イギリスの影に住む人々
- 〇一七五二 新田久美子 『カラーパープル』研究
- 〇一七五三 鈴木富美子 イギリスのパブと日本の大衆酒場の比較
- 〇一七五三 吉澤菜美子 『ソロモンの歌』研究
- 〇一七五四 村上奈穂 A Study of *The Bluest Eye*
- 〇一七五五 三宅枝里 『ライ麦畑でつかまえて』研究
- 〇一七五七 松岡裕也 Shakespeare on Film
- 〇一七五八 水野裕貴 『ソロモンの歌』研究
- 〇一七五九 杉本沙織 ウィリアム・フォークナー『死の床に横たわりて』研究
- 〇一七五〇 柴田智香 アリス・ウォーカー研究
- 〇一七五二 影山紘子 A Study of *Their Eyes Were Watching God*
- 〇一七五三 近藤千尋 A Study of *A Farewell to Arms*
- 〇一七五四 杉浦美晴 『カラーパープル』研究
- 〇一七五五 田口裕子 『ピローラの悲劇』—A Study of *The Bluest Eye*
- 〇一七五七 雑賀由希子 A Study of William Blake
- 〇一七五八 柴田裕子 黒人女性とコミュニティ——『スーラ』研究
- 〇一七五九 渡邊拓征 シェイクスピア劇の女達
- 〇一七五〇 寺林裕司 シェイクスピアの語彙
- 〇一七五二 小幡聡 シェイクスピアの悲劇についての研究
- 〇一七五三 大野絵里奈 Pecolar's Role in *The Bluest Eye*
- 〇一七五六 浅井景子 A Study of Emily Bronte
- 〇一七五七 松浦徹 The Adventures of Mark Twain
- 〇一七五八 岡本和恵 Robert Frost and the theme of the road
- 〇一七五九 伊藤佐知子 『Twinの求めた自由』—『ハックルベリ・フィンの冒険』研究
- 〇一七五〇 伊藤麻里 『ハックルベリ・フィンの冒険』におけるハックの成長について
- 〇一七五三 加藤明日香 異文化との遭遇—文学に見られる世界の中のイギリス—
- 〇一七五八 岡田亜希子 A New Heroine is Born



- 1750 伊藤翔市 『山にのぼりて告げよ』研究
- 1750 安藤里美 『ハムレット』研究
- 1757 鈴木順子 A Study of William Wordsworth

ドイツ語ドイツ文学専攻

- 1760 竹内 衣津香 カロリーヌ・リンクの『ピョンド・サイレンス』について
- 1762 飯上綾乃 グリム兄弟の『子供と家庭とメルヒェン』における初版と第七版の相違とその理由
- 1763 五十嵐 礼 『モモ』の時間について
- 1764 船山真弓 ウィーンにおけるウインナーワルツの歴史
- 1765 大塚 卓 ツェッペリン飛行船について
- 1766 合戸 希 ワーグナーのオペラ『ローエングリン』について
- 1767 請田侑子 ドイツにおける魔女狩りについて
- 1768 大橋倫子 ケストナーの生涯と作品
- 1769 河村有美 マリア・テレジアについて
- 1770 深見真衣 カール・ユーハイムとパウム

- 1763 森 真弓 エーリヒ・ケストナーの児童文学について
- 1764 藤原宏枝 豊橋におけるドイツ企業——フォルクスワーゲン社の企業戦略をめぐって——

クーヘン——ドイツ人捕虜の功績——

- 1765 築地史貴 『暗い世界』について
- 1766 奥田 舞 コルネーリア・フンケ『どろぼうの神さま』について
- 1767 山元ちひろ ヒトラーのユダヤ人政策について——ダッハウ強制収容所の場合——
- 1768 白井清佳 ニーベルングンの歌とゲルマン精神
- 1769 小島裕美 ルターと宗教改革について
- 1770 加藤伊織 カフカの『変身』とその人生観
- 1771 塩崎 真州生 エーリヒ・ケストナーとその作品『エーミールと探偵たち』について

フランス語フランス文学専攻

- 〇一七七一 倉地 裕 子 アルチュール・ランボーが探  
し求めた永遠について
- 〇一七七二 岩崎 竜太 日本とフランスにおける酒文  
化の比較研究
- 〇一七七三 鈴木 まり 『香水で比較する日本とフラ  
ンス』と歴史や文化から生じた  
ものゝ
- 〇一七七四 近藤 順子 フランスにおけるカフェの役  
割について
- 〇一七七五 牧野 訓子 シャルル・ペロー作『過ぎし  
昔の物語ならびに教訓』にお  
ける服飾表現の効果について
- 〇一七七六 大井 朋恵 'jardin'と公園をめぐる考察
- 〇一七七八 高島 恵 『カルメン』とメリ  
メの『カルメン』——登場人物  
の比較を中心として——
- 〇一七七〇 三浦 美里 ステファヌ・マラルメの作品  
における「髪」のイメージ
- 〇一七七一 栄嶋 由香 フランス語の呼びかけ表現に  
ついて
- 〇一七七三 小川 佳織 オノマトペについて
- 〇一七七四 松下 尚子 「星の王子さま」とサンテ  
グジュペリの生涯と共通点を  
通してみるメッセージ
- 〇一七七五 井上 敦斗 「フランス料理のエスプリ」
- 〇一七七六 伊藤 迪 ジョルジュ・サンドの生涯と  
作品に見る女性の可能性につ  
いて
- 〇一七七七 今井 加依 フランスの試みからみる路面  
電車による街づくりについて
- 〇一七七八 柴田 真夕子 ファンタジー童話『おかしな  
家族』からみるジャン・コク  
トー像
- 〇一七七四 近藤 弘和 サッカーフランス代表選手の  
ルーツについて——移民の子供  
たちの台頭——

# イエスとヘーゲル

——若きヘーゲルの宗教観——

宗教とは、怪しく何か特殊な人々が信仰するものだとか、多くの人は考えるだろう。目に見えないものを信用する事は、確かに怖い。

私が今回研究したヘーゲルという人物は、幼い頃からキリスト教とともに生きてきた。そして彼の言う理想の宗教は「人間の生き方そのもの」の事である。純粹に神を崇拜し、憧れ感謝する、本来はそんな生き生きとしたものであるのだ。

キリスト教を身近に感じてきたヘーゲルは批判的な視点からではあるが、キリスト教を研究する。当時のフランス革命など、社会情勢も複雑に絡み合つて、彼はキリスト教がこれからの時代に適應するかを見極めようとしていた。

現代のキリスト教は「神」を対象化し、客体化し、人間にとつて疎遠なものに作り上げてしまった。權威に基づくそのような実定的原因がどこにあるのか、彼はイエスまで

遡り考えている。

第一章では、ヘーゲルが立ち返つたイエスに沿つて、カント的要素も踏まえながら道徳について考察した。徳の人イエスがユダヤの前に挫折し、愛の人イエスが浮き彫りになつてきていることに着目している。

第二章では、イエス自身に実定的要素があつたのではないかと考えるヘーゲルについて述べている。実定的であり道徳的なイエスの宗教が矛盾してしまうのである。

第三章では、イエスと常に対立していたユダヤ精神について考察を行つた。ユダヤ民族は律法にのみ従う徹底した受動状態であり、それはアブラハムの精神からずつと繰り返される悲劇なのである。そしてそれは現代のキリスト教に重ねて考えられているし、ヘーゲル自身も自らをイエスにかさねて考えていたのかもしれない。

第四章は、初期ヘーゲルにとつて最も重要な概念「愛」

〇一P四一〇八 飼 沼 ゆかり

についての考察である。イエスは律法に対して常に反抗しているが、彼は律法を無効にするために来たのではなく、成就するために来たことを常々説いていた。律法を充たし、かつ止揚するもの、それが「愛」である。愛は、律法のように命ぜられるものでなく、喜んで果たされる生きた感情である。律法に隷従するユダヤ人や、自分の中に道徳法則をもっている人は、両者とも法則に命ぜられているのだ。愛においては、義務も掟も命令も存在しないのである。そして愛はそれだけでなく、すべての対立も失くすのだ。しかしながら、それでもイエスはユダヤ精神の前に挫折してしまふ。

第五章では、イエスはこれまで真つ向からユダヤ精神の受動的で他律的な状態に対立していたのに、もはやイエス自身がユダヤ精神の中に生き、受動的状態に陥ってしまつていることに注目している。

繰り返し現れるユダヤ精神のような運命。そしてそれへの愛における宥和は、ユダヤ精神の前では、その要素さえも失われていたので「愛」を呼び覚ますことは出来なかつた。では他の民族だったら可能だろうか。「愛」が心の底に宿る民族ならば。いや、そういつた民族にはイエスは必要ないだろう。そう考えるとイエスはユダヤ民族の前に現れるべくして現れたと考えられないだろうか。

ヘーゲルの考える新しい国家への精神革命。そのために

キリスト教がどこまで適応性を持つているか、キリスト教にかわる宗教があるのかを考えねばならなかつた。しかしこのように研究をしたヘーゲルの足跡を辿る事は、イエスと同じ立場に立つている一人の革命者と捉えざるを得ない事を、日を増すごとに感じた。また、このように現代のキリスト教に立ち向いメスを入れたヘーゲルを、現代のイエスとして考えることは少しもおかしくないのではないだろうか。

## 離婚に伴う親子関係の変容

— 新たな親子関係の在り方 —

私の中で重要な意味をもつ「家族」や「親子関係」というものを再確認することがこのテーマを選んだ動機である。夫婦間のみの問題としてだけ捉えられがちな離婚という問題を親子という関係に注目し、さらに忘れられがちな子どもという存在にも注目した。

家族の人間関係は、戦前の制度に裏付けられた上下の支配—服従の関係から、両性の本質的平等と友愛をテーマとする夫婦中心の家族関係へと転換した。

現代の日本では、離婚率が上昇し欧米先進諸国の傾向に近づきつつある。若い世代の高い離婚率と同時に、熟年離婚の増加傾向も注目すべき点である。性格の不一致を理由とする離婚の増加は精神的絆を重視することの表れであり、個人本位に結婚・離婚を捉える人が増加している表れであろう。ほとんどの離婚は単一の原因や理由によつてなされるのではなく、様々な要因が複雑に絡み合っている。

〇一S五〇一三 金 森 明日香

日本人の意識はここ数十年で変化し、離婚を容認する傾向は強まってきているが、欧米諸国に比べると離婚を否定的に捉える傾向は依然として強い。男女別では女性の方が全体的に容認傾向にあり、また若い世代の方が容認傾向は強く、世代が上がるほど慎重な考えを持っている。近年ひとり親世帯を捉える視点として、「欠損」家族ではなく「単親」家族として捉えようとする傾向がある。これは、離婚を家族病理としてではなく、家族の再組織化として捉えようという視点である。

親権に関しては、欧米諸国において次々と見直されている。この影響を受け、日本でも離婚後の共同親権を認める制度を検討しようという流れもある。また、日本において実際に面接交渉をしている親子は半数にも満たないという現状を考えると、何よりも子どもが親から愛されている安心感を抱くことを最優先にして離婚後の親子の在り方を検

討していく必要がある。養育費の未払い問題に關しても、法的な面では支払い義務が明確化されたが、人々の意識の面での変化はそれに追いついていない。離婚は必ずしも親子関係の解消ではないという意識や、養育費は子どもの為に支払うものだという認識を徹底させる必要があるだろう。

子どもは親の離婚に対して最初はネガティブな反応をすることが多くみられる。その程度は、日々の暮らしのなかで繰り広げられる騒動の規模や夫婦喧嘩の程度によって決まると言われている。子どもの為だけに夫婦が一緒にいても良い結果にはならないということが、実証されており、和解不能な夫婦が一つ屋根の下で暮らし続けることが、離婚よりも悪い影響を子どもに与えることもある。「離婚家庭の子どもたちが最も苦しむことになるのは成人期だ」と主張する学者もいる。また親の離婚を経験した子どもは、大人になつてから離婚しやすい傾向があるとも言われている。しかし、離婚が悪影響を与えるという研究結果の多くが、経済的打撃や葛藤や周囲の偏見といった要素を十分考慮に入れていない。

離婚がもたらす影響は人それぞれであり、子どもにとつて離婚はいつも複雑なメリットとデメリットをもたらずのである。離婚は、親としての機能や子どもの幸せに影響を与える、非常にさまざまな要素の一つに過ぎない。「離婚

をしたこと・離婚家庭に育つこと≠不幸な人生」ではなく、それぞれがどのように生きていくかで人生における幸福度は充分に変わり得るのではないだろうか。

今後、社会に求められる課題は、ひとり親家庭は決して特殊ではないと、その存在を問題化・特殊化しないで見つけることではないだろうか。

## Pecola's Role in *The Bluest Eye*

〇一七五五三 大野 絵里奈

『青い眼がほしい』の主人公であるピコラー・ブリードラヴは、貧しく、黒人の中でも特に黒く、周囲の人々に虐待される存在であり、自分が受け入れられるために必要なことは白人のような容姿になることであり、青い眼の少女になりたいと願うようになる。そして最終的には狂気へと追いやられることになる。ピコラーのこの哀れな結末が、どういう意味を持つているのか、また、この作品において、ピコラーがどのような役割を背負わされているのかということはこの論文の中心テーマとして考察した。

ピコラーの家庭は貧しい上に、独特な醜さを持っていた。彼らの独特さは「自分たちが醜いと信じていた」という点にある。父親のチョリーの醜さがその振る舞いの醜さによるのを別にして、他の三人は「根っから醜いというわけでもないのに、醜さをいわばマントみたいに身にまとっていた」のである。彼らは白人優位の社会の中で美しいとされるものを無条件に受け入れ、それに照らし自分たちを醜いと思い込んでいたのである。『ディックとジェイン』

の文章に描かれる家族とは異なり、ピコラーは酒乱の父親と、自身の家族への関心を失った母親と、彼らが繰り返すすさまじい夫婦喧嘩の中で生きていく。そしてピコラーはもし自分に青い眼があれば愛されるようになると考え、青い眼を得るために祈るのだった。そしてピコラーを狂気へと追いやるぎつかけとなつたのは父親による近親相姦である。ピコラーの自己否定は、周囲からの否定に影響されながらも結局は家庭における両親からの愛の欠如に由来しているのだ。

この作品には、黒人でありながら黒人性を否定して、できる限り白人に近い生き方をしようとする人々が描かれている。このような人々の生き方からもわかるように、「白人は美しく、黒人は醜い」という通念が出来上がっている白人優越社会の中で、黒人は、黒人的な資質に否定的な価値しか認めないようになってしまっている。そして、白人の肉体的特徴を美の基準とし、そのライフスタイルをモデルにしてしまうのである。貧しく、特に黒い肌の色をした

ピコーラを「醜い」と断じて退ける社会を生み出したものは、まさにこの白人優位の価値観である。そしてこの白人優位の価値観を持って生きる周囲の人々がピコーラの人生に関わる時、彼女を一層不幸へと追い込んでいくことになるのだ。

クローディアは、このピコーラの悲劇をその夏マリーゴールドが咲かなかつたことと結びつけ、土壌が適さなかつたのだと言う。つまり、社会と彼女を取り巻く人々が彼女を破滅させたのだと言うのだ。それはまさに白人優位の価値観が生み出した社会であろう。

ピコーラを嫌悪する黒人たちの深層に潜むものは、白人文化によって影響された無意識の自己嫌悪と白人への同化願望である。彼らが求めているものは、白い肌と中産階級化である。貧しく、皮膚が特に黒く、醜いピコーラは、彼らが嫌悪する黒人的資質を集約し、体現する存在なのである。よって彼らがピコーラに示す憎悪は、自己嫌悪の投影である。ピコーラは黒人社会が、自らのすべての否定的な特質を投影し、そのことよって自分をひきたたせることのできた、排除や抑圧の対象だったのである。つまり、無力なピコーラは黒人社会における「犠牲者」・「生け贄」だったのだ。

『青い眼がほしい』はピコーラの悲劇の責任を、白人社会の人種主義だけでなく、それを受け入れている黒人社会

の土壌にも求め、ピコーラの悲劇を黒人社会の問題として黒人が主体的に受け止めるよう訴えている作品である。



## ビゼーの『カルメン』とメリメの『カルメン』

——登場人物の比較を中心として——

〇一七七〇九 高島 恵

『カルメン』は、一八四五年にプロスペール・メリメが書いた小説である。そしてこれをベースにして、リュドヴィック・アレヴィとアンリ・メイヤックの二人が四半世紀の後にオペラの台本を書き、ジョルジュ・ビゼーがここに音楽をつけた作品である。しかしオペラ化された『カルメン』は、小説とはずいぶん違う印象を私達に与える。そこで私はその違いは何なのか、また小説とオペラの共通点や相違点を登場人物一人一人の特徴を分析することによって明らかにしたいと思う。

『カルメン』のあらすじは、騎兵隊の伍長であるドン・ホセという男が、魅力的な女性カルメンの誘惑によって、心を奪われてしまう。すっかりカルメンのとりこになった彼は、彼女に惑わされて、彼女のいる密輸団の仲間になつてしまう。しかし、彼女は彼の事を愛していなく、既に他人に恋をしていた。そして最後に、嫉妬に怒り狂つたド

ン・ホセがカルメンを刺し殺してしまう、という話である。そして私が小説とオペラにおける登場人物の特徴を細かく調べた結果、様々な事が明らかになった。ドン・ホセにおいては、小説の中ではカルメンを自分のものにしたという独占欲が強く、気性の激しい性格であるが、仲間思いの仁義に厚い男として書かれている。オペラの中の彼は、小説と比べると性格が和らげられ、カルメンへの思いがとても強い人物であつた。一方、カルメンは小説の中では平気で盗みもする小悪魔のような人物として書かれているが、オペラではドン・ホセと同じようにその性格がずいぶんと和らげられている。このように主役の二人においては、小説とオペラで様々な違いが挙げられた。それとは逆に、この二人における共通点もいくつか見つけられた。例えばドン・ホセがカルメンを一途に思うところや、カルメンが自由に生き、自由に死んでいくという自由を求める女

性であるところである。

また、オペラには小説には登場しない新しい人物がたくさん加えられていた。その主な人物が、ドン・ホセの許婚であるミカエラと、花形闘牛士のエスカミーリヨである。ミカエラは、ドン・ホセの故郷の女性で、カルメンとは全く正反対の性格をしている大人しい人物である。エスカミーリヨは、カルメンが好きになる闘牛士で、とても高慢で、自己中心的な人物である。他にも、にぎやかで明るい密輸の仲間達や、たばこ工場の女工達などが登場している。それに加えて、オペラには音楽がつけられているので小説よりもずいぶん明るい印象を与える。このようにオペラの中に様々な人物が加えられ、音楽が加わり、オペラは小説とは違った話になるのだ。

全体としてオペラは小説よりも登場人物の性格などが和らげられているのが特徴として挙げられた。これは当時オペラコミック座の制約があり、小説のような犯罪が起こるオペラが上演できなかったためである。しかし、小説のような暗さや強いインパクトがなくなったオペラが今もなお上演され続けているのは、台本作家の二人が一人一人の人物を生き生きとしたものに創り上げ、ビゼーが音楽をつけて、オペラにはなくなってしまう迫力を補っているからだ、と私は考えることができた。このように小説とオペラにおける相違点がいくつもあり、この二つの『カルメン』

という作品は、全く別のものだと言えるのだ。